

# 二百十日

小川未明

青空文庫



そんか 高く羽虫を追いかけていたやんまが、すういと降りたとたんに、大きくもの巢にかかつてしまいました。しまったといわぬばかりに、羽をばたばたして逃げようとしたけれど、どうすることもできませんでした。

縁先で、新聞を読んでいたおじいさんは、ふと顔を上げた拍子に、これが目に入ってじつと眼鏡の底から、とんぼの苦しがるのを見たのであります。

かわいそうにと、おじいさんは、思いました。年をとると、すべてのことに対して、憫れみ深くなるものです。そして、いまにもくもが出てきて、目の前で、とんぼの殺されるのを見るにしの

びませんでした。

「正二しょうじや。」と、おじいさんは、孫まごを呼びました。自分じぶんにはどうにもならなかったからです。

あちらのへやで、明日あしたの宿題しゅくだいをしていた正二しょうじは、何事なにごとかと思おもつて、すぐに祖父そふのところへやってきました。

「なんですか、おじいさん。」

「あれ見みな、いまやんまが飛とんできて、くもの巣すにかかったんだ。かわいそうだから助たすけてやんなさい。」

正二しょうじは、いつも、こんなようなことに出であつたときは、人ひとにいわれなくとも、自分じぶんから進すすんで助たすけてやる性質せいしつでありました。「くもは、どうしたのか、出でてきませんね。」と、正二しょうじは、不ふ

思議しぎそうに、見上げみあげていました。

「いや、どこかに隠かくれていて、やんまの弱よわるのを待まっているのだ。なかなかずるいやつだからな。はやく助たすけてやんなさい。」

おじいさんは、まごまごしていると、やんまが、疲つかれて死しんでしまうと思おもったのでした。

正しょうじ二は、勝手かってもとへいつて、長ながい物干ものほしぎおを取とつて、裏うらの方ほうへまわりました。庭にわには日ひごろから、おじいさんの大だいじ事じにしてある植木鉢うえきばちが、たなの上うえに並ならべてありました。彼かれは、それを落おとさないように、自分じぶんの力ちからにあまる長ながいさおを持もち上あげて、垣根かきねの際きわまでいきましましたけれど、まだそのさおの長ながさでは、くもの巢すまでとどきませんでした。

「おじいさん、だめですよ。」

やんまは、まだ生きていて、ときどき思い出したように、羽ばたきをしました。けれど、どうしたのか、くもはまだ姿を見せませんでした。

「さおが短いか、よわったのう。」と、おじいさんは、眼鏡の中から、小さな光る目で、やんまを見つめていられました。

「ああ、重い。」

正二、さおをドシンと垣根の上へ倒しました。そのくもの巢は、高い木立の枝から、隣家の二階のひさしへかけているので、隣の屋根へ上がるか、それとも隣の塀の上に登らなければ、さがとどかなかったのでした。

「かまわずにおきましようか。」

しかし、おじいさんには、知らぬ顔かおをしていることができませんでした。

「あちらの堀へいへ上がれば、とどくだろう。」

「僕ぼく、やだなあ。」

「いい子こだから、助たすけておやり。なんでもおまえのほしいものを買かってやるから。」と、おじいさんは、いいました。

「ほんとう？ おじいさん、僕ぼくにハーモニカ買かってくれる。」と、正しょうじ二は、聞ききました。このあいだから、おじいさんに、ねだっている品しなです。

「買かってやるから、助たすけておやり。」と、おじいさんは、いいま

した。

これを聞くと、正二は、一時は、うれしそうな顔つきをしましたが、急になんと思つたか、

「いいよ、おじいさん、僕買つてくれなくてもいいの。」といいながら、さおをかついで、隣の家となりいえの門もんを開けて入はいつていきました。ちようどそのとき、そろそろ糸いとを伝つたつて、大きな黒くろいくもが、やんまに迫せまつていました。

これを見た正二は、急いで、堀へいへ上あがると、

「こいつめ。」といいながら、さおでまずやんまを払はらい、つぎにくもを落おとしました。巣すがずたずたに切きれて、やんまは、やつと飛とんでいくことができたし、くもはちぢこまって下したへ落おちました。

「おお、ようした。ようした。ハーモニカを買ってやるぞ。」

正二しょうじが、庭にわへもどつてくると、おじいさんは、生き物ものの命いのちを助たすけた喜よろこびに、顔かおをかがやかしていました。

「おじいさん、こんど僕ぼく、いいお点てんをもらつてきたときでいいよ。」

「どうしてか、なぜ今日きょうではいらないのだ。」

おじいさんは、不思議ふしぎに思おもいました。

「どうしても。だって、やんまを助たすけてやるのは、あたりまえだろ。」

正二しょうじ、こんなことで、日ひごろの言いい分ぶんを通とおすのは、あまりうれしくなかつたからでした。

「そうか、それは、感かん心しんだ。ごほうびをもらわなくても、正ただしいことは進すすんでやるのが善よい子供こどもなのだ。」

おじいさんは、上じょう機き嫌げんでありました。正しょう二じも、おじいさんにそういわれると、ハーモニカを買かつてもらったよりもうれしかったのでした。

晩ばん方がたのことです。

正しょう二じが、外そとへ出でると徳とくちゃんちゃんが、飛とんできました。  
「正しょうちゃん、おもしろいことをしない。」といました。

「おもしろいことって、どんなことだい。」

「お化ばけげごごつつこだよ。」

「お化ばけげごごつつって、どうするの。」

徳ちゃんは、正二に、いろいろ知恵を与えたのです。

「すてきだね、待つておいで。僕、家へいつて絵を描いてくるから。」と、正二は、走り出そうとすると、

「僕、お母さんのエプロンを持ってくるからね。」

徳ちゃんも、家へ向かって駆けていきました。二人は、他の子

供らに、知られぬように、とうもろこしの畑であうことにしまし

た。脊高く茂ったとうもろこしの畑には、うまおいが、鳴いて

います。星晴れのした、青い夜の空を白い雲が走っていました。

もうどこことなくゆく夏の姿が感じられたのです。

徳ちゃんは、お母さんのエプロンを持って先にいつて待つてい

ると、正二は、自分で急ごしらえの般若面を持ってやってき

ました。

「ああ、ろうそくがなくては、いけないね。」

「そうだ、うりで行燈あんどんを造ろうよ。僕ぼく、小さいろうそくを持つてくるから。」

正二しょうじは、家いえへ仏壇ぶつだんへ上げるろうそくとマッチを取りとにいくと、徳とくちゃんちゃんは、その間あいだに大おおきなうりをさがしてきて、中なかの種たね子こを出だして、燈火あかりのつくような穴あなを明あけていました。そこへ正二しょうじがもどつてまいりました。これで、すつかり用意よういができてしまいました。

「だれが、お化けばけになるの。」

「じゃんけんして、負まけたものにしてようや。」

ふたり  
二人は、じゃんけんをしました。正二しょうじが、負まけました。

「正ちゃんしょうちゃんが、お化ばけだよ。」

「おもしろいな。」と、正二しょうじは、白しろいエプロンを着きて、自じ分の造つくった般はん若にやめん面めんを被かぶりました。

「どんなだい？ 徳とくちゃん。」

「おう、すごいよ。ほんとうのお化ばけみたいだ。」

「ほんとう。」

「頭あたまへ、とうもろこしの毛けをつけるといいよ。」

徳とくちゃんは、枯かれた毛けを取とつてきて、正二しょうじの頭あたまへのせました。

それから、うりのちようちんに、火ひをつけて、ぶらさげました。

濃こい緑みどりいろ色の火ひが、あたりを暗くらく照てらして、正二しょうじの白しろい姿すがたを

きみわる  
気味悪く見せました。

「やあ、おつかないな。」

とく  
徳ちゃんは、これを見て逃げ出そうとしました。

とく  
「徳ちゃん、そんなにおつかない。」

「ぞつとするよ。」

「おもしろいな。だれか呼んでおいでよ。」と、正二は、とう

もろこしの葉蔭に隠れました。

おうらい  
往來で、二人の小さな子供が、もう暗くなつたのに、まだ遊

んでいました。勇ちゃんと光ちゃんです。

あした  
「明日は、二百十日だよ。川の堰をはらつて、魚を捕るのだね。」

ゆう  
「勇ちゃんも川へ入る？」

「入るさ。」

「僕、兄さんが魚を捕って投るのを、岸にいて、バケツへ入れる

のだ。」

「光ちゃんも川へお入りよ。」

「なまずがとれるといいな。こいもいいな。」

「かにかいいよ。」

「かめの子が、いいよ。」

そこへ、徳ちゃんが、やってきました。

「勇ちゃん、畑にお化けが出るよ。」

「お化け？ うそだい。」

「うそなもんか、いつてごらんよ。」

三人は、さびしい畑の方へ歩いていきました。とうもろこしの葉が、夕風に動いて、さつきから鳴いているうまおいの聲が、夜のふけるにつれてだんだん冴えていました。

「どこに？」

「もつといくんだよ。」

「こわいな。」と、光ちゃんが、いいました。

「お化けなんか、うそだい。」と、勇ちゃんは、先になろうとして、なすの畑へ踏み込みました。

「ほら、あすこに、青い灯が……。白い着物を着て立っているだろう。」

「あつ、お化けだ！」と、光ちゃんが、逃げ出しました。つづい

て勇ちゃんも逃げようとしたが、徳ちゃんが立っているの、徳ちゃんのうちしろから、じつと、とうもろこしの畑をすかして見ていました。

「だれか、いたずらしたんだよ。」

「勇ちゃん、そばへいける？」

「こわいな。」

「それごらんよ、だれかおおせい呼んでおいでよ。」

このとき、勇ちゃんは足もとの土を拾って、青い灯を目あてに投げました。すると、青い灯が動いて、白い着物がこちらへ近寄ってきました。

「こわい。」と、徳ちゃんが、逃げ出しました。勇ちゃんは、独

りしにもの狂ぐるいに土つちを拾ひろつて投なげていました。そのうち、土つちがお化ばけにあたつたのか、

「あつ。」といつて、青あおい灯ひが下したに落おちました。

「目めに土つちが入はいつた……。勇ゆうちゃんおよしよ。」

白しろい着き物を着きた、お化ばけが、いいました。

「正しょうちゃんなの、なあんだ……。」「

勇ゆうちゃんは、すぐそばへ走はしつていきました。

「お面めんを被かぶつていたの。」

「目めが痛いたくてあかないよ。」

「正しょうちゃん、ごめんね。」

勇ゆうちゃんの叔父おじさんの家いえは、ここから近ちかかつたのです。村むらの端はし

にあつた、お医者さままでした。内科だけでなく、目も診察する  
 のでした。勇ちゃん徳ちゃんは、正ちゃんの手を引いて、勇  
 ちゃんの叔父さんの家へいきました。

叔父さんは夜の往診からちようど帰つてきたばかりでした。  
 「どれ、どれ。」といって、正ちゃんの目を見て、水で洗つてく  
 れました。そして、薬をさしてくれました。

「どう、もうなんともないだろう。」

正二は、目を開けると勇ちゃんの叔父さんは笑っていました。

「叔父さん、お化けごっこをして、僕が土を投げたんだよ。」

「乱暴をして、目の中へ土を入れたりしてわるいじゃないか。」

叔父さんは、正二のポケットからのぞいている般若面を見

つけて、

「これを被かぶつたんだな。」といいながら、引き出ひだして自分じぶんで被かぶるまねをしました。みながひょうきんな叔父おじさんの顔かおを見て笑わらいました。

それから、三人にんは、話はなしながら暗くらい道みちを帰かえりました。

「光みつちゃんは、どうしたろうか。」

「もう、ねんねしたろう。光みつちゃんは、臆おく病びょうだね。」

「勇ゆうちゃんもおっかなかつたろう。」

「僕ぼく、徳とくちゃんが、大騒おおさわぎをしないから、きっとだれかいたず

らをしているのだと思おもつたよ。」

「いたずらなんかして、ばかをみてしまった。」と、正しょうじ二じは、

後悔こうかいしました。このとき、木の枝きえだに当たある風かぜが、いつもとちがつて強つよかったです。

「二百十日とにおかの風かぜだね。」と、徳とくちゃんが、いいました。思おもい思おもいに、空そらを仰あおぐと、星ほしの光ひかりが、見みえたり隠かくれたりしました。雲くもが走はしっていたからです。

「明日あすは、土曜どようだから、学がっこう校から帰かえったら、川かわへいって、魚さかな捕とりをしよう。」と、たがいにいって、別わかれました。

正しょうじ二はは、夜中よなかにふと目めをさますと、ゴウゴウといつて、風かぜの音おとがしています。

「風かぜが西にしへまわったから、雨あめになるかな。」と、庭にわの方ほうで、おじいさんの声こえがしました。

「おじいさまは、起きていらつしやるのだろうか。」と、正二しょうじは耳みみをすましていると、たなの上うへの植木鉢うえきばちを下おろして、家の内いえうちへ入いれているようでした。おじいさんは、実みのついたぎくろから先さきに入いれられたであろうと思おもいました。

「ぎくろのつぎにはどれかな。」

正二しょうじは、寝ねながら、いろいろあつた植木鉢うえきばちのことなど考かんえました。「梅うめか、それとも松まつかな。」そんなことを空想くうそうしているうちに、いつかまたぐつすりと思入ねいつてしまいました。

夜よが明あけました。けれども、まだ風かぜの音おとがしています。正二しょうじは起きて庭にわ先さきへ出でてみると、いろいろの木きの葉はが、無理むりに引ひちぎられたように、庭にわ一面めんに散ちらばつていました。そして、百さるす

日紅の花が、ふさのつけ根からもがれていました。

学校へいく時分には、風はいくぶん衰えたが、頭の上の空には、まだものすごい雲が後から後から駆けていました。正二は、途中で同じ組の年雄くんに出会いました。

「年ちゃん、ひどい風だったね。」

「はとが帰らないのだよ。」と、心配そうな顔つきをして、年雄くんがいました。

「えつ、はとが。」と、正二は、驚きました。

「昨日、兄さんが、静岡の方から放したのさ、それがまだ帰ってこないのだ。」

「風に出あって、どっかに休んでいるんだろう。」

「千キロの記録きろくがあるのだけど、もう年をとつてとしいるから心配しんぱいなんだよ。」

正しょうじ二も、年雄としおくんの家いえのはどのことが気きにかかつたので、学が校っこうから帰かえつていってみました。だが、まだ、はとは帰かえつていませんでした。川かわの堰せきはらいが延のびたというので、年雄としおくんと二人ふたりで、村むらの端はしを散歩さんぽすると、昨ゆうべ夕はい入はつた畑はたけのとうもろこしがだいぶ倒たおれて、頭あたまの上うへにひろがった、青あおい空そらが急きゆうに秋あきらしく感かんじられたのです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学六年生」

1939（昭和14）年9月

※表題は底本では、「二百一十日《とおか》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二百十日

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>